

【法隆寺金堂 釈迦三尊像 光背銘 原典】

法興元廿一年 歲次辛巳十二月、**鬼前太后崩。**

明年正月廿二日、**上宮法皇枕病弗愈**

于食王后仍以勞疾 並著於床。

時**王后王子等** 及與諸臣、深懷愁毒 共相發願。

仰依三寶、當造釋像 尺寸王身。

蒙此願力、轉病延壽 安住世間。

若是定業 以背世者、往登淨土 早昇妙果。

二月廿一日癸酉、王后即世翌日、法皇登遐。

癸未年三月中、如願敬造釋迦尊像 并使侍及莊嚴具竟。

乘斯微福、

信道知識 現在安隱。

出生入死 隨奉三主、紹隆三寶 遂共彼岸。

普遍六道 法界含識、得脫苦緣 同趣菩提。

使司馬鞍首止利佛師造。

赤字は引用の便のため、句読点、文の区切りは大中臣正比呂による

【法隆寺金堂 釈迦三尊像 光背銘の書き下し文】

法の興りし元より三十一年、歳は辛巳に次る十二月、鬼前太后崩ず。

明年正月二十二日、上宮法皇病に枕し、愈か弗。

于食王后よりて勞疾を以て、並びの床に著きたまふ。

時に王后王子等、及び諸臣と與に深く愁毒を懷きて、共に相ひ發願す。

三宝を仰ぎ依りて、當に釈像の尺寸王身なるを造るべし。

此の願力を蒙り、病を転じ壽を延し、世間に安住す。

若し是れ定業にして、以て世に背かば、往きて淨土に登り、早く妙果に昇らむことを。

二月二十一日癸酉の日、王后即世の翌日 法皇登遐す。

癸未年の三月中、願の如く、敬いて釈迦の尊像ならびに使侍、

及び莊嚴の具を造り竟りぬ

斯の微福に乗り、信道の知識、現在には安隱にして、生を出でて死に入らば、三主に随ひ奉り、三宝を紹隆して共に彼岸を遂げ、六道に普遍する

法界の含識も、苦縁を脱することを得て、同じく菩提に趣かむ。

司馬鞍首止利佛師をして造ら使む。

令和五年十一月二日 大中臣正比呂 記



